

〈研究ノート〉

『レディー・アナ』に見るトロロープの挑戦と 未来への期待

香山 はるの

アンソニー・トロロープ(1815-82年)の後期の小説、『レディー・アナ』(*Lady Anna*, 1874年)は、「バーセットシャー年代記」(*The Chronicles of Barsetshire*, 1855-67年)やいわゆる「パリサー・ノヴェルズ」(*The Palliser Novels*, 1865-80年)と呼ばれる政治小説に比べて、これまであまり注目されなかった作品であるが、1870年前後のトロロープの社会に対する意識の変化が明確に表れているという点で興味深い。アナ・ラヴェルとダニエル・スウェイトの身分違いの恋愛をめぐるこの物語は、結婚、相続、裁判などトロロープの小説の御馴染みのテーマに加え、殺人未遂などセンセーショナルな内容も含んでいるが、最も興味深いと思われるのはダニエルという「リスペクタブル」な労働者のヒーローが描かれていること、そして彼が周囲の反対を押し切って伯爵家の令嬢、アナと結ばれることであろう。

1873年4月から翌年の4月まで『フォートナイトリー・レビュー』(*Fortnightly Review*)に掲載されたこの小説が、中流階級を中心とする読者の反発を招いたことは想像に難くない。たとえば、『サタデー・レビュー』(*Saturday Review*)は、アナと「粗野な」仕立屋、ダニエルとの結婚を「社会秩序の崩壊」として手厳しく批判している(Smalley, 387)。とりわけ、ダニエルが社会の不平等に異議を唱える「ラディカル」な思想の持主であることがこうした反発を一層強めたことは明らかである。他方、トロロープ自身の反応もまた興味深い。アナとダニエルの恋愛に抗議した二人の友人、レディー・ウッド(*Lady Wood*)とメアリー・ホームズ(*Mary Holmes*)に宛てた手紙の中で、トロロープは激しく反駁している。「もちろん、あの娘[アナ]は仕立屋と結婚しなければならない。」(*Letters II*, “To Lady Wood,” 589)。「『レディー・アナ』は私が書いた最も良い小説だ」(*Letters II*, “To Mary Holmes,” 622)。さらに、死後に

出版された『自伝』(*An Autobiography*, 1883 年)においてもトロローブは同様の考えを記している。「私が彼女[アナ]を仕立屋と結婚させたことに、皆文句を言った。けれども、もしアナが仕立屋の恋人を捨ててハンサムな若い貴族[ラヴェル伯爵]と結婚したら、彼らは何と言っただろうか? 非難の声はどんなに激しくなったことだろう!」(347) これらの言葉にはトロローブが当初からアナとダニエルの結婚を是認する明確な意図を持っていたことが示唆されている。トロローブは多くの小説の中で女性の恋人に対する忠誠心を称えているが、『レディー・アナ』においてはアナとダニエルの身分の隔たりを大きくすることで、それが引き起こす社会的な意味も追及している。ジェフリー・ハーヴィ(Geoffrey Harvey)も指摘しているように、ここには民主的な社会へ向かう時代の流れを必然と捉えるトロローブの認識、また、個人の価値を階級感情に優先させる彼の「リベラル」な考えが認められるのである(31)。

『レディー・アナ』の物語の舞台は1830年代のイギリスであるが、トロローブがこの作品を執筆したのは1870年代前半である。スティーヴン・オーゲル(Stephen Orgel)らの批評家が指摘しているように、実際この小説は選挙権獲得運動など階級間の闘いが激化した1860年代後半の世相を反映している(xiii)。たとえば1866年には労働者がロンドンのハイド・パークを占拠するいわゆる「ハイド・パーク事件」が起き、翌年には第二次選挙法改正が施行された。この改正は保守党のダービー内閣の下で行われたが、選挙資格が一般に「戸主および10ポンド間借り人」まで引き下げられたことによって、都市労働者の多くが選挙権を得、有権者が100万人拡大したことはよく知られている¹。キース・マックレランド(Keith McClelland)が書いているように、この改正は新たに有権者となった労働者に対する社会の認識を大きく変えたという点で重要である。すなわち、勤勉で経済的にも独立した「男らしい」、「リスペクタブル」な労働者という概念が生まれたのである(72)。これは小説中、仕立屋のダニエルが誠実な労働者として好意的に描かれていることに示唆されている。

ダニエルは彼の恋敵、^{ライヴァル}ラヴェル伯爵と様々な点で対照的に描写されている。たとえば外見であるが、前者は肌や髭の黒さ(“swarthy,” “black-bearded” [103])が強調されているのに対し、後者は金髪(“fair-haired” [50])という設定になっている²。また、性格についても同様である。ダニエルは自分の意見に自信を持ち、時に横柄な態度も取る朴訥な青年であるが、ラヴェル伯爵は人当たりが柔らかく社交的である。トロローブはラヴェル伯爵の魅力も認

めた上で、一見目立たないダニエルの価値を徐々に読者に訴えていく。

まず、トロロープがダニエルの勤勉さや独立心をしばしば「男らしさ」と結びつけていることに注目したい(“manly” [189, 264], “a very man” [383], “a higher manliness” [501])。ダニエルは「働き蜂」である自分に誇りを持ち、「世の中のために最も役立つこと」が「最も男らしい」(“most manly”) ことだと捉えているが(249)、これは、アンドリュー・ダウリング(Andrew Dowling)が『ヴィクトリア朝文学における男らしさと男性作家』(*Manliness and the Male Novelist in Victorian Literature*)の中で論じているように、勤勉を「男らしさ」の概念と結びつけるトロロープの考えに通じるものである(82-95)。トロロープが『自伝』の中で、15分間に250語書くという自らの「生産的な」創作方法を披露し、それがもたらした経済的報酬について満足そうに語っていることはよく知られているが、「神に与えられた知的能力を最大限に使って働いている」(249)と自負するダニエルの姿勢は作者の共感するところであろう(Morse, *Reforming Trollope*, 62)。

また、ダニエルと彼の父親、トーマスのラディカルな政治的信条についてもトロロープは基本的に支持している。4章、「ケジツクの仕立屋」で語り手は「裕福な者と貧しい者、そして地位の高い者と低い者の隔たりを小さくすること」がダニエルの理念であると言っているが、ポール・ジョンソン(Paul Johnson)が言うように、ここにはトロロープの「平等主義」(x)が反映されていると思われる。ジョンソンが示唆するように、トロロープは個人の価値を財産や家柄より優先させる(x)。このため、彼の小説では概して特権階級に追従することなく、自己の権利を主張するキャラクターは肯定的に描かれている。たとえば、ダニエルの父親、「庶民」のトーマスが、先代の卑劣なラヴェル伯爵を義憤に駆られて殴り倒したというエピソードは、『バーセット最後の年代記』(*The Last Chronicle of Barset*, 1867年)で貧しい副牧師のジョサイア・クローリーが、主教の妻で教区の問題に介入する横柄なブラウディ夫人をやり込める場面と同様、爽快である(「黙りなさい、女よ……糸つむぎでもしている方があなたには合っている」[188])。そして、息子のダニエルも父親以上に、家柄や資産に頓着しない。事実彼がアナにプロポーズしたのは、財産目当てだったのではなく、純粹に彼女を愛していたからである。

さらにトロロープはダニエルが教養のある「思慮深い」若者であることを随所で強調している。たとえば、ダニエルはトマス・モアの『ユートピア』(*Utopia*, 1516年)やジェイムズ・ハリントンの理想共和国論、『オセアナ連邦』(*The Commonwealth of Oceana*, 1656年)のような古典的思想書を読んでいる。

また、彼がシェイクスピアの『シンペリン』や『ハムレット』、『ヘンリー4世』等文学作品にも広く親しんでいることが、小説の後半に印象深く示されている。22章でアナは、「レディーは、仕立屋のような紳士とは言えない人と結婚すべきではない」と忠告するアリス・ブルーストーンに対して、毅然とした態度でダニエルを擁護する。「彼は賢いし、従兄[ラヴェル伯爵]よりも色々なことについて立派に話せるわ」(234)。この意味でダニエルは、1860年代後半に生まれた「男らしい」、「リスペクタブル」な新しい労働者像を象徴していると言えるかもしれない。さらに、苦境にあったアナと彼女の母親、ジョセフィーンを長年支えてきたこと、加えて、小説の終盤で自分を殺害しようとしたジョセフィーンを許したことも、ダニエルの優れた人格を示唆するものである。

アーサー・ポラード (Arthur Pollard) らの批評家は、ダニエルのキャラクターが魅力的に描かれていていないと考え、その理由としてトロロープの階級に対するアンビヴァレントな気持ちを指摘している (148. Orgel, xiv)。すなわち、ポラードによれば、トロロープはアナとダニエルの結婚を正しい結末としながらも、アナが「(貴族の) 家系にふさわしくない」選択をしたこと、すなわち、2人の結婚に反対するラヴェル牧師のような「保守派の敗北」を、心情的には受け入れることができなかったという (149)。確かにダニエルは欠点のない完璧な人間ではない。しかし、これまで論じてきたように、トロロープが彼のキャラクターを敬意と共感を込めて描いたことは私には確かであるように思われる。それはある意味でトロロープのよりラディカルな面に注目する見方と言えるかもしれない。今日ヒリス・ミラーやデボラ・ディーネンホルツ・モースらの批評家がこの立場を取っている。たとえば、モースはダニエルのことを「この小説において最も賞賛すべき人物」(*Reforming Trollope*, 63) と評しており、また、ヒリス・ミラー (Hillis Miller) も「ダニエル・スウェイトは結局のところ……あらゆる点において、ラヴェル伯爵よりもレディー・アナの夫にふさわしい」(7) と述べて、二人の結婚を支持している。

実際トロロープはダニエルの恋敵であるラヴェル伯爵をしばしば辛らつに描いている。たとえば、温厚な人柄で「あらゆる点で紳士」(“every inch a gentleman,” 50) のラヴェル伯爵から求婚され、当初アナは胸をときめかせるが、伯爵の求めているのは自分の財産であるということを彼女は忘れなかった。ラヴェル伯爵は「仕立屋」のダニエルを見下しているが、モースも指摘するように、アナが相続する資産を当てにしているのは貧しいダニエルではなくラヴェル伯爵であることは重要である (*Reforming Trollope*, 61)。実

際語り手はアナにアプローチする伯爵の目的を「さましい」(“sordid”)という言葉を繰り返し使って皮肉っている(*Reforming Trollope*, 61)。また、社会的に釣り合うとはいえ、伯爵が初めて会ったアナに愛を誓い、プロポーズするのはそもそも不自然である。小説の後半でも語り手は、彼のアナに対する思いの浅薄さを示唆している。「彼はあの娘[アナ]を愛してもいた—少なくともアナの病気によって優しい気持ちになっている間は、彼女を心から愛していると自分では思っていた」(404-405)。さらに、ダニエルを「卑しい生まれの職人」(490)と呼び、彼とアナの結婚を一家の「恥辱」と見なすラヴェル家の人々の傲慢さをトロロープが風刺している点も重要である。特に46章で頑固なジュリア・ラヴェルが、甥の伯爵に向かって次のように言う場面は興味深い。「だってね、フレデリック、アフリカの黒人を洗ったところで、所詮白くすることはできないんですからね」(492)。ダニエルの肌の黒さが「劣等な人種」という概念と結びつけられている点が印象的である³。

トロロープは1870年前後に書いた幾つかの小説の中で、上流階級のプライドや驕りを鋭く批判した。たとえば、1868年から69年にかけて書いた『ハンプルスウェイトのハリー・ホットスパーク卿』(*Sir Harry Hotspur of Humblethwaite*, 1870年)のヒロイン、エミリーは父親(准男爵)の家名に対するプライドの犠牲となり、傷つき衰弱していく。小説の後半、苦悶する娘を案じたホットスパーク卿が「自分は、これまでの人生でずっと家系や家名ということに重きを置きすぎたのではないか?」(228)と自問する姿は痛ましい。また、1870年の『目には目を』(*An Eye for an Eye*)も、異なる階級や宗教に対する偏見が引き起こした悲劇の物語である⁴。フレッド・ネヴィルは貧しいカトリックのアイランド娘、ケイト・オハラに恋をするが、彼は将来「伯爵」になる身分であり、彼女との結婚は「不釣り合い」であると身内に猛反対される。結局フレッドは周囲の圧力に屈して結婚に踏み切れず、そのため逆上したケイトの母親に殺害されてしまう。最終章では、フレッドの結婚に反対した彼の叔母、レディー・メアリー・スクループが自責の念に苛まれて侘しく隠遁生活を送ることが示唆されている。

『レディー・アナ』は排他的な上流社会への批判という点ではこれらの作品と共通しているが、結末はより楽観的である。それはトロロープがこの小説を執筆した時の状況にも関係があるように思われる。

トロロープは『レディー・アナ』を、1871年の5月から7月にかけて、次男のフレデリック(Frederic James Anthony Trollope, 1847-1910年)が暮らすオーストラリアに向かう船の中で書いた⁵。トロロープの『自伝』によれば、

学業があまり芳しくなかったフレデリックは、1865年にパブリック・スクールを卒業すると、オーストラリアに移住して牧羊業者になる道を選んだ(326)。これは当初トロロープ夫妻を悲しませたが、フレデリックの意思はその後変わらなかったため、二人は経済的支援をしながら、異国で生活する息子に会いに行ったのである(*An Autobiography*, 326. Glendinning, 354-355. 404-412)。このような視点から見ると、『レディー・アナ』のエンディングには、自らの人生を選択した若者に対するトロロープの温かい思いが微妙に反映されているように思われる。

たとえば、アナがラヴェル伯爵との結婚を拒んでダニエルと結ばれたことは、愛なき結婚をして不幸になった母親ジョセフィーンの過ちを繰り返さなかったという点で意義深い(Morse, “Trollope’s *Lady Anna*,” 52)。さらに、ダニエルに関しては、モースが示唆するように、時にトロロープの考えを「代弁」しているウィリアム・バターソン卿が、小説の後半で次のように言っているのは注目に値する(*Reforming Trollope*, 41)。「ダニエル君は利発で、誠実だと聞いている……将来立派な紳士になっても不思議ではない」(428)。「5年後には彼は下院議員になっているかもしれない。10年後には—彼が望むのなら、ダニエル・スウェイト卿だ。」(437)。これらの言葉には、生まれに拘わらず個人の優れた資質が「紳士」をつくり得るという—ラヴェル家の人々には当初想像もできなかった—リベラルな考えが示唆されている。アナとダニエルのオーストラリアへの旅立ちは、ある意味ではイギリス社会で居場所を失った者の「逃避」と見ることもできよう。しかし、別の角度から見ればそれは自立した人生のスタートと捉えることができるのである⁶。既に述べたように、『レディー・アナ』はこれまであまり注目されることのなかった作品であるが、「パーセットシャー年代記」の読者が抱くような保守的なトロロープのイメージとは異なる要素が認められるという点で重要である。この小説においてトロロープは、イギリスの伝統的な価値観の全面的な否定はしていないが、そこに潜む歪みを明らかにすることによって、新しい時代の到来を予示しているのである。

最後に、この小説を基にした *Lady Anna All At Sea* という劇が昨年、2015年の夏からイギリスで上演されていることについて記しておきたい。これは2015年のトロロープ生誕200年祭のイヴェントの一環として、イギリスのトロロープ・ソサエティ(The Trollope Society)から委託された新進気鋭の脚本家、クレイグ・バクスター(Craig Baxter)が手がけた翻案劇である。2015年8月にロンドンのパーク・シアターで初演され、その後、バースやケンブ

リッジ、ウィンチェスター、ウィンザー等南イングランドを中心とする都市や町で上演されている（予定では2016年10月上旬のソールズベリーでの公演が最終公演）。『デイリー・エクスプレス』（*The Daily Express*）や『テレグラフ』（*The Telegraph*）をはじめ、メディアでは概ね好評を博しているようである⁷。筆者も2016年9月にグリニッジ・シアターで観劇の機会を得た。約2時間の劇で原作と比べるとかなり短いものになっていたが、*Lady Anna All At Sea* というタイトルにも示唆されているように、二人の男性から求婚されて困惑する（“all at sea”）ヒロイン、アナのストーリーと、この小説を航海中に（“at sea”）執筆したトロロープとその家族の描写が巧みに織り合わされる演出が印象的であった。トロロープはラヴェル家が象徴するイギリス上流社会を完全に否定はしていない。しかし、彼の眼差しは未来—因習的なイギリスの階級制度から解放された新世界—に向けられている。バクスターは詳細なリサーチを基に、トロロープの息子、フレデリックがオーストラリアで地元の娘と結婚したこと、また、アンソニー・トロロープ夫妻がメイドとして同行した娘、イザベラ・アーチャー（Isabella Archer）がオーストラリアに留まり新しい人生を切り開く決意をしたこと等、興味深いエピソードをプロットの中に効果的に組み入れることによって⁸、この点をより鮮明に打ち出していた。

注

1. Keith McClelland, “England’s Greatness, the Working Man.” *Defining the Victorian Nation: Class, Race, Gender and the Reform Act of 1867*, pp. 71-118 を参照。
2. *Lady Anna* からの引用は Oxford World’s Classics Paperback 版（1990年）に拠るものとし、以下頁数のみ示す。
3. モースはこの小説における「人種」の問題に注目し、シェイクスピアの『オセロー』と関連づけて論じている。 *Reforming Trollope*, pp. 39-67.
4. この小説は1870年に執筆されたが、単行本として出版されたのは1879年である。
5. トロロープは1871年の5月25日に書き始め、7月19日—メルボルンに着く1週間ほど前—to 脱稿したという。R. C. Terry, ed., *Oxford Reader’s Companion to Trollope*, p. 604.
6. Nicholas Birns によれば、トロロープはしばしばオーストラリアを「未来への展望を与えてくれる場所」と捉えている。“Trollope and the Antipodes.” *The Cambridge Companion to Anthony Trollope*. Ed. Carolyn Dever and Lisa Niles, p. 193.
7. たとえば、『デイリー・エクスプレス』はこの劇について「ゴージャスでウィットに富み、全く魅

力的である」(2015年8月28日)と評し、また『テレグラフ』の批評欄には「魅惑的な劇場のス・フ・レ」(強調は筆者。2015年8月21日)という見出しがつけられた。

8. フレデリックの結婚、及びイザベラ・アーチャーのオーストラリア移住については、Nigel Starck による *The First Celebrity: Anthony Trollope's Australian Odyssey* の5章と6章を参照。

引用文献

- Birns, Nicholas. "Trollope and the Antipodes." *The Cambridge Companion to Anthony Trollope*. Ed. Carolyn Dever and Lisa Niles. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 181-195.
- Dowling, Andrew. *Manliness and the Male Novelist in Victorian Literature*. Aldershot: Ashgate, 2001.
- Glendinning, Victoria. *Anthony Trollope*. London: Pimlico, 1993.
- Harvey, Geoffrey. *The Art of Anthony Trollope*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1980.
- Johnson, Paul. Introduction. *Lady Anna*. By Anthony Trollope. London: The Trollope Society, 1990. vii-xv.
- McClelland, Keith. "England's Greatness, the Working Man." *Defining the Victorian Nation: Class, Race, Gender and the Reform Act of 1867*. Ed. Catherine Hall, Keith McClelland and Jane Rendall. Cambridge: Cambridge UP, 2000. 71-118.
- Miller, Hillis. Introduction. *Lady Anna*. By Anthony Trollope. New York: Arno Press, 1981. 1-10.
- Morse, Deborah Denenholz. *Reforming Trollope: Race, Gender, and Englishness in the Novels of Anthony Trollope*. Farnham: Ashgate, 2013.
- _____. "Trollope's *Lady Anna*: 'Corrupt Relations' or 'Erotic Faith'?" *The Anna Book: Searching for Anna in Literary History*. Ed. Mickey Pearlman. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1992. 49-58.
- Orgel, Stephen. Introduction. *Lady Anna*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1990. vii-xix.
- Pollard, Arthur. *Anthony Trollope*. London: Routledge & Kegan Paul, 1978.
- Smalley, Donald, ed. *Trollope: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Starck, Nigel. *The First Celebrity: Anthony Trollope's Australian Odyssey*. Bath: Lansdown Media, 2014.
- Terry, R. C., ed. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- _____. *An Eye for an Eye*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- _____. *Lady Anna*. Oxford: Oxford UP, 1990.
- _____. *The Last Chronicle of Barset*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- _____. *The Letters of Antony Trollope*. Ed. John Hall. Vol. II. 1871-1882. Stanford: Stanford UP, 1983.
- _____. *Sir Harry Hotspur of Humblethwaite*. Oxford: Oxford UP, 1991.